

# アルパック ニュースレター

VOL.111

発行/2002年  
1月1日

ISSN 0918-1954

迎春



旧城下町篠山のまちなみ（本文中に関連記事があります）

## 目次 contents

- 
- ・新年あけましておめでとうございます ..... 2
  - ・町屋再生「西陣町家スタジオ」がオープン ..... 5
  - ・蘇るか古代のランドスケープ ..... 6
  - ・もてなし拠点「交通広場」がオープンしました ..... 8
  - ・こちらは海辺でワークショップです ..... 9
  - ・まちづくりの芽生えは、人脈の土壌から ..... 10
  - ・市民による市民交流フォーラムに市民として  
参加しました ..... 11
  - ・三都物語・名古屋「まちを元気にするイベント2題」 ..... 12
  - ・三都物語・大阪「尖りショップは界隈の縁辺部へ」 ..... 14
  - ・三都物語・京都「京都のフリマ近況」 ..... 15
  - ・アルパックプラネット10号を発行 ..... 16
  - ・メディア・ウォッチ ..... 17
  - ・まちかど ..... 18

新年あけましておめでとうございます

代表取締役社長／金井 萬造



21世紀の最初の激動の年  
多くのことを学びました。

パワー、スピード、変革、実践、協働  
など多くのキーワードと多くの友を得ました。  
家庭でも娘が結婚し、新鮮な原点  
に立ち戻っています。

ここの宝物を光輝かせる年が2002年  
です。知恵とネットワークを活用して、新しい  
付加価値をつけていきたいと思つてます。  
激動の年に身を投じ、挑戦したいと思  
います。若いの復活が第一です。  
アライアンスを支援していたらいい方々と  
協働して地域社会の発展をめじます。

取締役会長／三輪 泰司



本年もどうぞよろしくお願い致します

京都事務所長 / 山口 繁雄



「文明の衝突」は、当然予想されたことではありましたが、21世紀の幕開けは衝撃的でした。

我が国は、これまで「国際」化を主要なテーマに、グローバル化に如何に対応するかを追求してまいりましたが、21世紀は、いよいよ「民族際」「都市際」の時代に入ったか、という感じがしています。

国内に目を転じて、分権化の時代が到来し、個性的で自立的な地域づくりを如何に進めるかが問われています。

グローバルスタンダードとかナショナルスタンダードを越えて、それぞれの生き生きと息づいていけるような地域づくりを進めていかねばと、決意を新たにしているところです。

本年もよろしくお願ひ申し上げます。

大阪事務所長 / 杉原 五郎



## 21世紀は参加型まちづくりの時代

昨秋、7-7ショップのつとを体験しました。なぎさのトレイルづくり、老朽住宅地のリニューアル、駅周辺のまちづくり、港の活性化など、テーマは多岐にわたり、地域は、海辺あり、港あり、市街地あり。多様な取り組みを通じて、参加型まちづくりの時代が到来していることを実感しました。

21世紀2年目の今年、20世紀半に芽生えた新しい動きを大切に育ていく年にしたいと思えます。

新年あけましておめでとうございます

名古屋事務所 / 尾関 利勝



2002年はアパルク名古屋の20年

新年あけましておめでとうございます

今年、アパルク名古屋は開設20年を迎えます。  
スタッフ一同、明るく活気あふれる街づくりへの貢献を  
めざして、自立と協同の精神で、自ら改革を模索  
します。従来と同様、ご厚情を賜りま  
よう、お願い申し上げます。

名古屋事務所長 尾関利勝

東京事務所 / 小林 佑造



小作舟に至川に谷川は、中橋<sup>ひらばし</sup>田中翁が築いたと存じの方は少ないのではなか  
ら。田中翁は、少年期に、不意に興味を覚え、10歳の時に中倉省吾に弟子入りし、  
109歳(1892~1999)まで永眠されるが、現役彫刻家として活躍され方です。  
能くぞろくで、スツクリしな事が多く、モノをよしと時  
私は田中翁に学ばれたと述べています。  
門を入ると、翁が存続の時、これから  
30年間(必要は材料(作福目的は決まらぬ)と)  
として入手されたモノがある、500年取月を越え  
高さ4m程の7尺の木が置かれています。  
この前に立つ時、百歳のエネルギーを  
感じられるのです。  
腕を伸ばせば、立ち止まるとはいつか  
森の行者(45歳)、長樂坊(70歳)です。 田中翁:小作舟中倉町1-1-5



本年もどうぞよろしくお願ひ致します

九州事務所長・(株)よかネット  
代表取締役社長／山田 龍雄



あけましておめでとうございます。

糸乘より代表を引き継ぎ、早や4年目が過ぎようとしています。

当社の営業面での礎のひとつとなっているのが、15年前ごろにアルバックのサポートを得ながら係わってきました「北部九州学園都市構想」での業務でした。この計画によって当社のネットワークは大学の先生をはじめ、福岡・佐賀県庁に広がり、今でも、この“人つながり”が営業につながっています。

その時のタイミングもありますが、「学園都市づくり」の業務がなければ、当社所員も半数程度であったかも知れません。やはり、ネットワークを広げる業務や活動を継続していくことの大切さを痛感します。

昨年は、まちづくりの専門家（建築士、土地区画整理士、不動産鑑定士、公認会計士、再開発コーディネーターなど）がいる事務所9社で協同組合「地域づくり九州」を設立しました。（経済産業省と国土交通省2省の認可）このメンバーの方とも一緒に地域に密着した、幅の広い仕事をしていきたいと思っています。また、所員一同、地域づくりの商品開発にもチャレンジし、新たな仕事開拓の年にしたいと思っています。

本年もご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願ひします。

九州事務所（(株)よかネット） 山田 龍雄

※新年のご挨拶を、より心のこもったお手紙と新時代に向けた個性をお届けしようとメッセージカードの掲載といたしました（編集部）

きんきょう

【近況報告】

町屋再生—西陣町家スタジオがオープン

〔京都事務所／三輪 泰司〕

12月3日、西陣町家スタジオがオープンしました。伝統的な西陣の間屋建築と庭園を保全し、新産業と人材育成の拠点をつくることを目的としています。京都府の支援を受けて、京都造形芸大のコミュニケーション・デザイン研究所を中心に、アットホームジャパン、ベネッセコーポレーションが共同して、革新と継承を続けてきた西陣の技術と結び、ブロードバンド向けデジタルコンテンツの制作から、子供向けの情報技術教育まで展開する産官学連携のIT研究開発拠点です。

環境デザイン学科は改修工事の助っ人を頼まれました。条件が厳しく、期間も費用も限られているので、私が直接担当し、直営型CM(コ

ンストラクション・マネジメント)方式で木工事と電気工事だけに絞り、実質2週間で仕上げました。NPO法人(予定)西陣町家スタジオの田中貞夫事務長、情報デザイン学科の奈良盤雄教授には、たいへんお世話になりました。

町家の再生利用が流行みたいになっていますが、建築的には3つの問題があります。

第一は、ほんまものか、擬似町家再生なのか、改修のコンセプトを明確にすることです。大正末期に建てられた平田篤三郎さんのお宅をお借りしているのですが、コンセントがなくて掃除機を使うのにも困ったように、建築当初から全く手を加えられていない、伝統的和様式建築の純正品です。目的から基本方針はほんもの保全です。必要な機能は満たしつつ、従来の姿・形を残し伝統と最先端のコントラストを実現しました。

第二は、とは言っても、機能は全く変わります。年齢80歳位になるこの建物も、見たこともないパソコンがずらりと並んで、びっくりしたでしょう。電力とインターネットのケーブルが入ります。特に信頼性ある電力が生命、木造建築で、インテリジェントビルと同じ性能を要求されるわけです。それをやる技術者を選ばねばなりませんでした。

第三は、芸大がやるのですから、このような枠の中でも、面白い空間造形を実現したいですね。出来上がれば床の間と最新のパソコン達と言ったミスマッチで達せられているようなものですが、提灯による照明やネオンのオブジェなど、情報デザイン学科らしい小物が柔らかく或いは、あやしく和室空間を演出しています。

実は、昨今「町家」再生で疑問なのは、擬似町家になってしまうことです。平田邸が生粋と言うわけは、例えば柱は基石のうえにトンと

乗っているだけ、スジカキも耐震壁もありません。建築基準法では「既存不適格」ですね。しかし、仔細に見ますとどういいうわけか、基礎に切石が使われていましたが、床下には石灰が叩きこまれ、風通しもよく、80年も経っているのに木の腐りもなく、幾度か中程度の地震を経験しているはずですが、全体の不陸も傾きも見られません。これは今時分の在来工法と称している、見たところ同じ軸組み木造建築とは、原理が全く違うのです。これを私は和風建築として、平田邸のような伝統的和様式建築と区別しています。思想が違うのです。戦後の建築基準法や構造計算基準は、地震や台風に力まかせて対抗しようとする考えに立っています。日本の伝統は揺れるにまかせ、柱と梁の接合部などギシギシして、運動のエネルギーを摩擦の熱エネルギーに転換してしまい、おまけに釘やボルトで締めたり傷つけたりしていないので、簡単に解体して部材を再利用する、つまり自然に優しい考え方です。力まかせの思想は、土木の世界にもあるのではないですか。ソフトの教育や福祉にもあるのではないですか。力まかせや偽物もそれなりの役割があると認めますが、食品に表示義務があるように文化に関わる町家にも素性についての説明書きが要りますね。



3日1日開所した「京都西陣町家スタジオリ」

### 「西陣町家スタジオリ」開所

京都の町家を利用した歴史的な空間を現代のIT研究開発拠点「京都西陣町家スタジオリ」が3日、京都市東山区の西陣地区にオープンした。町家の保全に加えて、小学生のIT教育に関する教材づくりの人材育成を進め、和室産業の低迷に悩む西陣地区

### IT関連の人材育成

の活性化を目指す。同スタジオリは、正統な建築文化の継承と、現代のIT技術の融合を図る。また、地域の活性化を図る。同スタジオリは、正統な建築文化の継承と、現代のIT技術の融合を図る。また、地域の活性化を図る。同スタジオリは、正統な建築文化の継承と、現代のIT技術の融合を図る。また、地域の活性化を図る。

### 蘇るか古代のランドスケープ

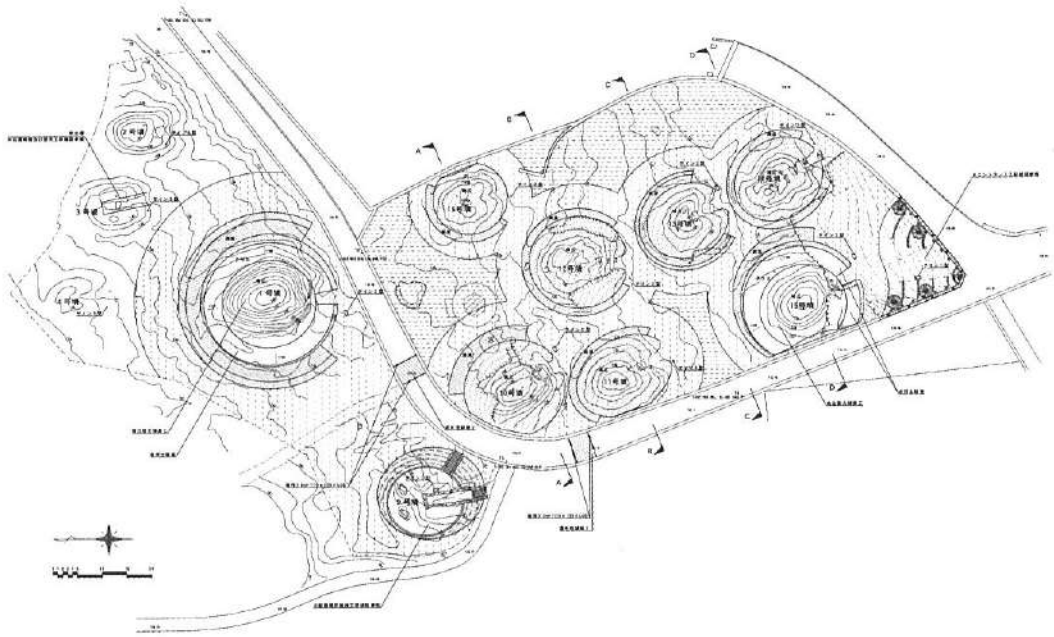
【大阪事務所／中川 天開】

古墳と聞いて皆さんは何を想像されるでしょう。権力者の墳墓、豪華な埋葬品、前方後円墳等々古代へのロマンをかき立てられませんか？

ここは、兵庫県多可郡中町にある東山古墳群。時代は6～7世紀頃と想定されていますが誰が埋葬されていたのかはわかっていません。最大で直径約25mの規模をもつ大小15もの円墳が約1.5ヘクタールの範囲内に群をなして立地しており、他ではちょっと類を見ない独特の

西陣町屋スタジオリ

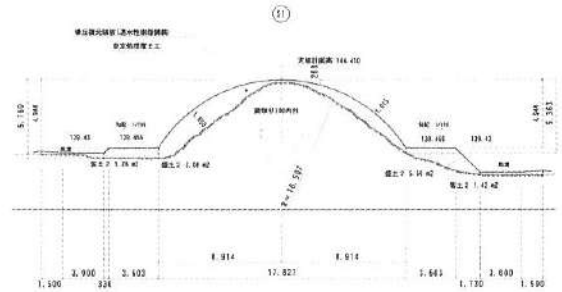
出典：日経新聞（平成13年12月14日）



全体計画平面図

ランドスケープを形成しています。また、全国的に見ても極めて珍しい「陶棺」=焼き物で作られた棺が12号墳から出土しています。

この東山古墳群は北はりま田園空間博物館のサテライト(展示物)の一つとして位置づけられ、古墳公園としてその南群の整備が行われることとなり、この実施設計のお手伝いをさせていただきました。設計にあたっては、「往時の姿に古墳を蘇らせる」ことを一つのテーマとし、京都府立大学菱田哲郎助教授をはじめとする検討委員会により設計内容の検討を取りまとめたところです。現在、現場では整備工が進められており、古墳形状の復元に向けた丁張りが古墳群に設定されているところです(平成13



断面図

年12月現在)。来春には、往時の姿に古墳群が復元され、古代のランドスケープが実現するだろうと楽しみにしているところです。とは言っても往時の姿を知っている人は誰もいないのですけれど・・・。



全国的に珍しい石室内の陶棺  
出典：パンフレット



工事中の古墳公園

## もてなし拠点「交通広場」がオープンしました [京都事務所／永濱 幹雄]

赤穂の中心ゾーンである加里屋に、去年の10月末、「交通広場」がオープンしました。播州赤穂駅から赤穂城址へ向かう、通称「お城通り」の中間点に位置します。赤穂城跡周辺だけに滞留する観光客をまちの中心まで呼び込み楽しんでいただくということで、観光バスの乗り降り、トイレ、休憩、そしてイベント等にも活用できるスペースです。地元自治会、婦人会、商店街、商工会議所、青年会議所からなる「忠臣蔵のふるさとまちづくり協議会（以下：協議会 本誌96号、99号、104号で紹介）」と行政との、官民協働によって実現しました。平成10年に協議会が取りまとめた「忠臣蔵のふるさと～次代への提案（加里屋まちづくり構想）」を踏まえた、都市計画道路である「お城通り」の拡幅整備を、まちづくりと一体的に取り組む「身近なまちづくり支援街路事業」を活用して整備されました。

### 住民管理で「もてなし」づくり

広場内にある公衆便所の特徴は、清掃を協議会が担っていることです。朝9時から夕方6時までの利用となっていますが、毎朝8時半ごろには当番制で清掃されています。婦人会の方々が中心となっています。しかし、家事や仕事で入れない方もあるため、週2回は民間の清掃業者に依頼しているのが実情です。決して順調と

は言えないのですが、いつもきれいにしているため、使う側の観光客にとっては、まちの「もてなし」が感じられる場所となっています。数少ないそんな場所が、まちの人たちに支えられて、今後増えていくことを願っています。

また、広場に面するトイレの壁面には、覗き小窓の形をした展示ケースが8つ並んで設けられており、絵や小物などを展示できるようになっています。こちらは市で管理されていますが、現在は観光課から提供された赤穂の名所旧跡等の写真が展示されています。これを常設展示として、今後は展示のネタを一般に募るなどしてはどうかといった話も出てきています。協議会等まちの人たちとも連携しながら、心温まるいきた活用に期待したいところです。

### 交流の舞台、実現へ

現在、市から観光業者への働きかけもあって、バス停車場では一日に数台の乗降利用が始まっています。ここから観光客がまち中を歩いてお城観光に向かいます。12月には、義士祭に合わせ、この広場の隣地を活用して地元の手作りイベントが行われました。

この交通広場が、来訪者を誘い、もてなし、ひと・もの・ことのターミナルとなり、地元と来訪者とが賑わい交流する舞台となる。そんな構想の思いが一つずつ実っていく光景をめに浮かべながら、地元協議会の方々と行政との協働のまちづくりが実ることを願っています。



交通広場



公衆トイレ



## こちらは海辺でワークショップです

【大阪事務所／竹野 潔】

巷では、ワークショップが大流行です。昨年11月に(財)大阪湾ベイエリア開発推進機構の主催により海辺をロケーションにワークショップを行いました。

同機構では「なぎさ海道」の構成要素である「なぎさトレイル」(遊歩道、自転車道)を利用向上させるため、その方策と整備ガイドラインを検討する調査を行っており、今回のワークショップはその一環として行いました。

ワークショップのねらいは、海沿いの散歩やサイクリングなどをする際に、もう少しこんなところやあんなところを改善してほしい、という意見やアイデアを集めて、開催地以外にも適用できる海辺の市民利用向上方策をまとめることでした。

開催地は、比較的新しい「西宮浜」と「マリニピア神戸・アジュール舞子」(各地とも1回開催)を選びました。「なぎさトレイル」の利用者は、すべての人々を対象としているため、参加者は市民団体のメンバーが中心でした。さらに、垂水区役所と垂水社会福祉協議会の協力を得て身体障害者数名(車いす利用者、視覚障害者、聴力障害者)にも参加いただきました。

当日は、海辺を歩いた後、各テーブルに分かれてグループ討議を行いました。参加者の多くは海辺への思いや愛着をいろいろな形で持っておられる方々でしたが、西宮も垂水・舞子もと



西宮市立青少年海の家でのワークショップ風景

でも景観がすばらしいところだということが共通認識でした。

当日出された海辺利用の向上のためのアイデアや意見を少し紹介すると、夏の暑い日や冬の風よけに木陰や並木をつくる、足腰にやさしいみちをつくる(地道、芝、ボードウォーク)、自転車と歩行者が近くをすれ違うので専用レーン化するなどです。また、広域的には、隣接する人工島や地区外の手辺とネットワークを強化することで、さらに地域の魅力が向上するという意見もありました。

また、身体障害者からは危険な箇所やその改善方法などの意見とともに、「私たちは介助者がいないと海辺に行けない、今回のようなワークショップに参加することで、その機会を得てうれしい」ということも聞き事務局一同、今回の意義を別の角度から再認識することもできました。

後日、市民団体のリーダーの方から電話をいただき、参加者から今回のワークショップがとても好評で、よい経験をしたという意見が数多く寄せられていることや、今後も同様のワークショップに参加したいということを開き、事務局にとってうれしいばかりでなく、海辺づくりの新たな展開を予感させるものとなりました。

このような縁結びをしていただいた垂水区役所と垂水社会福祉協議会の方々に、この場を借りてお礼申し上げたいと思います。



アジュール舞子管理事務所でも借りたワイドタイヤ型車いす

## まちづくりの芽生えは、人脈の土壌から —アルパックセミナーの収穫—

[大阪事務所／小阪 昌裕]

### なぜ今、歴史文化が重視されるのか

21世紀の2年目を向かえ、著しく変化していく時代の中にある一方で、21世紀は心を重視する時代ともいわれ、各地で心の安らぎを求めるまちづくりがはじまっています。

人は何に安心を感じるのか、それは自分が誕生する以前の時代にあるようです。だから、今、地域の歴史文化や古いものに目が向けられるのかもしれない。

### 小学校は心の安らぎのシンボル

高野口町(和歌山県、107号で紹介)では、昨年から木造建築の活用に着目したまちづくりの取り組みが具体的にはじまっています。JR駅舎のギャラリー化から始まり、昨秋、開催されたイベントも一つの契機に、まちなかの民家の保存・公開が実現しています。

例えば、町内にある築70年の木造小学校を例にあげると、町教育委員会の全面建替え方針に対し、従来、開発整備の視点の方が強かった都市計画課が、建物保存の動きに変わりつつあります。また最近、住民が主体となって組織化された「高野口まちづくり協議会」が中心となり、まち歩きのイベントが企画・開催されました。その中で、大学や県文化財センター、建築士会有志等による建築的な再評価や小学校OBの要望などにより、現存する建物の一部保存の動きにまで高まってきています。まさに点から線への建物保存の実例となっています。

### 新市の歴史文化の再評価

昨今、新聞紙上をにぎわしているいわゆる市町村合併により、3年前に誕生した新「篠山市」

では、合併特例債も活用した新規施策の一つとして、昨年の夏、旧中学校校舎と新規施設を同敷地内でタイアップした「篠山チルドレンズミュージアム」(所管は教育部局ではなくまちづくり部局)がオープンしました。一方、教育委員会ではまちづくりへの効果を重視した視点で、約20年前に手がけた調査を基礎に、旧篠山城下町の「伝統的建造物群保存地区」指定に向けた取り組みを、住民参加により進めているところです。こちらは、点、線からさらにステップアップして面への動きです。

### 人とまちとの出会い

昨秋、大阪事務所において、「伝建地区」関係の文化庁の荻谷勇雅氏をお招きし、大阪府教育委員会、「伝建地区」の先輩自治体である富田林市、関連する研究者等に上記の篠山市と高野口町の関係者も交え、「町並み保存とまちづくり」と題したセミナーを開催しました。

セミナーのねらいは、一つのテーマに関し、住民をはじめ、国、府、市町村レベルの行政、教育研究機関、商工会等の経済団体など、多様な主体によるまちづくりの情報交流の場づくりをすることでした。このような動きとなった背景には、所員の人脈をはじめ業務等を通じて知り合えた人脈の掘り起こしがあげられます。当日には、公私を超えた思わぬ人とまちとの出会いもありました。

これらの経験を通して21世紀のコンサルタントの果たすべき役割の一つとして、時代が求めているテーマを掲げ、空間を越え、多様な立場の人を各主体として立体的に結びつけていく土壌づくりとその核となることが大切であると実感しました。

## 市民による市民交流フォーラムに市民として参加しました

〔大阪事務所／鮎子田 稔理〕

尼崎の東の玄関口として、再開発が進められているJR尼崎駅前北地区（潮江）の小田公民館で、11月10日市民まちづくり交流フォーラムが開催されました。アルパックでは20余年にわたり尼崎駅前の再開発事業（本誌99号でご紹介）に係わってきました。市街地再開発事業として平成11年に完成したこのまちが真に生きた街として輝くために市民や行政のたゆまぬ努力が続いています。

私自身、この潮江に移り住んで、1年半が過ぎました。JR尼崎駅まで、徒歩3分。大阪まで15分、という利便性と商業施設の充実はおそらくこれ以上を望むべくはない程の環境です。しかし、1人暮らして仕事に追われる日々では、地域とのつながりを培う時間と心のゆとりを持っていないことに多少なりともジレンマを感じていました。フォーラム当日朝のお誘いにも関わらず出かけて行ったのは、会場の近さよりも地域コミュニティへの渴望に起因するのかもしれません。

さて、この市民交流フォーラムを開催した「あまがさき市民まちづくり研究会」は尼崎市第2次基本計画への市民参加型提案事業とし

て、市の公募により集まった市民が提言後引き続きまちづくりについて様々な調査・研究を行ってきたグループが母体です。これからの協働のまちづくりに向けて、市民が正しい情報とまちづくりの知識を持って、多様・多面の理解と行動が重要と考え、市民主体のまちづくりをネットワークしていこうという研究会です。今年度は県の地域活動推進講座助成で、「わがまちを知る・創る」と題したまちづくり塾を開催し、市民まちづくり交流フォーラムはその集大成ということでした。

第1部では建築史家川島智生氏による「尼崎の近代遺産とまちづくり」と題したわがまち発見講演が行われ、参加者からも「尼崎にこんな近代遺産があったとは…」という驚きの声があがりました。引き続き、「我がまち歴史文化ゾーンのまちづくり市民提言」が行われ、同研究会の「アミュージアム・ネット研究会」自らが、尼崎の歴史文化ゾーンのまちおこしに名乗りを挙げました。

第2部では、市民活動討論が行われ、市内5つの市民活動の取り組みについて代表による討論が行われ、現場からの切実な実情と展望が示されました。

続く第3部では、様々な地域からひっぱりだこで大忙しの近畿大学工学部助教授の久隆浩氏





田能の里芋入りのっぺい汁の総括講演が行われ、第2部の討論内容や各地の取り組みの教訓を踏まえながら、市民活動のこれからの方向を示唆いただきました。

地域での活動が、町会などの「義務」的なものから、「私がしたいこと：意志」「私ができること：可能」へと広がり、このフォーラムのような取り組みを通して、各々の情報を認知し・理解を深め、ネットワークを築いていくことや、テーマに限定されずに「やりたいこと」を共有することで、いろいろの人が参画する場が広がっていくこと。その他、これからはインターネットがこの質的な変化を醸成していくだろうということなど示唆に富んだお話でした。

今後のまちづくりはshould（義務）ではなく、will（意志）と言われる久先生こそまさにwillを持って参加しておられることが、その楽しそうなお話しぶりから窺うことができました。

このフォーラムが開催された小田公民館は私の住むルゼフィール潮江から徒歩1分という場所にありながら、利用するのは初めてでした。尼崎市民のまちづくりに対するエネルギーと暖かさに触れ、自分なりのまちづくりへの参加手法について考えながら、とりあえず帰りに頂いた田能の里芋（本誌105号で紹介）で早速「のっぺい汁」をつくり、ほっこりとあたたまった次第です。

## 三都物語・名古屋

### まちを元気にするイベント2題

〔名古屋事務所／尾関 利勝〕

#### 広ブラ・イベントと街角コンサート

名古屋の目抜き通り広小路を昔のように復活させようと言うのが、名古屋市中心市街地活性化基本計画の骨子。その実験を昨年10月6日（土）、7日（日）、広ブラ復活のための環境演出として公開空地を活用して、オープン・カフェ式のテントと椅子を置き、お茶を出すという試みをしました。これに色をそえたのが6日だけ実施した街角コンサートです。

会場は沿道の公開空地の中から、回遊効果が期待され、かつ所有者の了解を得られた4カ所が選ばれました。都合良く飲食店があったのは1カ所、臨時店舗設置1カ所、缶のお茶・コーヒーの協賛品を提供した1カ所、残り1カ所は休憩施設だけになりました。

コンサートは人気のストリート・ミュージシャン・コンテストを意図しましたが、準備がタイムリミットに間に合わないため、会場ごとに提供したいジャンルを検討、アルパック・ネットワークを活用し、愛知県立芸術大学音楽学部とフォークシンガーの大橋たつやさんの協力で演奏グループを確保しました。

開会式をした中区役所前では、県立芸大生による金管五重奏と打楽器五重奏のアンサンブル



栄サンシティビル：金管五重奏

ルがクラシックとポピュラーを演奏。五色のトレーナーをカラフルに着分けたのは学生の発想、ムレのファンファーレで開会式を盛り上げ、同じ県立芸大学生による金管五重奏とサクソ四重奏を演奏した電気文化会館前では、コンサートホールの玄関に合わせて服装をシックに黒でまとめ、格調高い雰囲気を出した。当初、弦楽器も検討したのですが、楽器が気候に影響されやすく屋外向きではないため管・打楽器の編成となりました。

ヒルトンホテルに隣接するアムナット広場では地元商店街からMC(司会)とPA(音響装置)を提供され、フォルクローレやガムランなど民俗音楽の5組が演奏。カフェが無かったのが残念でした。

ビジネス街で休祭日は閑静な伏見の白川ビル前では弾き語りのフォーク&アイリッシュ系5組が演奏。いずれもライブに出演する実力派。聴き応えのある演奏でしたが、休日のビジネス街で聴衆が少なく、アンケートでも平日にやったらと言う意見を頂戴しました。

4 会場合計で 14 組が出演、約 2300 人の聴衆から大変好評を得ました。

名古屋では昨年から路上オープンカフェの実験をしていますが、それだけではまだ物足りないようです。今回の実験は場を公開空地に変え、そこにコンサートを加えてみました。街に無秩序に流れる音は、ややもすると雑音になってしまいますが、意図して流れる心地よい音楽は、街を歩き交う人の足を止め、街角をおしゃれに演出してくれます。そんなことがこの実験で得た成果の一つです。

事前告知をマスコミを使って積極的にすれば、もっと多くの来客があっただろうという御



アムナットビル：フォルクローレ

意見もありましたが、おしゃれな街角の演出としては、さりげなく実施することに実験の意味があったのだと思っています。

一方、日頃ストリートで演奏することのない音楽学生にとっては、まちを歩き交う人に自分たちの音楽を印象づける緊張感が勉強になったと言うのが大方の感想でした。女子だけの打楽器の学生達は、演奏外の休憩時間中にも、予定になかった呼び込みまで積極的にやってくれました。予想しなかった専門家にとっての教育効果と言う副産物です。そしてアルパックにも何人かの街角コンサート・マネージャーが育ちました。

#### 住まい・まちづくり屋台村

同じ 10 月 6 日・7 日、名古屋市千種区吹上の中小企業振興会館では「2001 スーパーハウジングフェア in あいち・なごや」の一環で、愛知を中心に全国から 36 団体を集め「住まい・まちづくり屋台村」を開催。

住まいとまちづくりに関する市民団体の紹介、来場者と市民活動グループとのコミュニケーション、団体相互および行政との連携と協働を趣旨に、市民活動団体が一同に会し、ブース出展、活動紹介や交流を行いました。4 月、住宅月間あいち・なごや実行委員会の呼びかけを発端に 5 つの市民活動団体が集まり、輪を広

げながら企画をすすめ、6～7月にかけて参加団体を公募しました。

以後、参加者の出展会議を構成、ワークショップを重ね、プログラムや会場レイアウトを決定。この方式をとったのは、夢いちば等の市民イベントの経験で、当日には出展参加者が交流出来ないことから、事前に交流を重ね、開催当日はその仕上げの場にするという意図でした。その結果、愛知から26、全国の市民まちづくり活動を支援する(財)ハウジングアンドコミュニティ財団の協力で熊本、岡山、京都、奈良、滋賀、長野、東京、千葉から10団体が参加。実績ある団体だけに、充実した展示が行われ、地元団体の交流ワークショップも功を奏し、気楽な中にも熱の籠もった充実したイベントとなりました。

6日は、ブース設営後の10時に開村式、以後、各ブースの紹介や中央ステージでの交流が始まりました。中央ステージでは趣向をこらしたイベントをお披露目、この日のメインは千葉大学延藤教授による幻灯会。

17時から(社)住宅生産団体連合会主催の「すまい+環境+NPO」シンポに参加、引き続き交流会に合流し、輪を広げました。

7日は10時開場と同時に参加団体そろい踏みの紹介。以後、趣向をこらしたイベントで開場を盛り上げ、17時には短いけれどホットな交流イベントの幕を閉じました。

参加団体は6つのテーマに分けられたゾーン毎にブース出展。「住まいづくり・都市づくりゾーン」は、あいち産直住宅研究会、あいちの木で家を作る会、雨水利用と緑化を進める会、E L-N E T、欠陥住宅をつくらぬ会、C & I、人間環境ネットワーク、病気にならない住宅研究会、やさしい住まいの支援ネット(以上愛知)の9団体、「コミュニティ・ゾーン」は、

安住の会、高蔵寺ふれあいPUB、高嶺下の洞を考える会(以上愛知)、NPO・FUSIO長池(東京都)の4団体、「まちおこしゾーン」は、郷土歴史まつり、風穴一座、かん・ぶん・けん、削ろう会、羽黒竹取物語、まちかどの泉(以上愛知)、RACDA(岡山県)、練馬まちづくりの会(東京都)の8団体、「自然ゾーン」は、相生山緑地オアシスの会、雑木林研究会、おおくさ探検隊、ガイア造景研究所(以上愛知)の4団体、「歴史ゾーン」は、古材バンクの会・中部ネットワーク、白壁アカデミア(以上愛知)、熊本まちなみトラスト(熊本県)、緋扇の会(京都府)、小諸町並み研究会(長野県)、ヴォーリズ建築保存再生運動一粒の会(滋賀県)の6団体、「支援ゾーン」は、人にやさしいまちづくりネットワーク連絡会、ボランタリー・ネイバーズ(以上愛知)、週間まちづくり(東京都)、奈良まちづくりセンター(奈良県)、千葉まちづくりサポートセンター(千葉県)の5団体でした。

準備期間の短いあわただしいイベントでしたが、力のある市民団体の参加だけに、企業展示と比べて、ホットな充実した見応えのあるイベントが出来、ホットしています。

### 三都物語・大阪

#### 尖りショップは界隈の縁辺部へ

[大阪事務所/中塚 一]

「ミナミ」というと、自分達の世代では、アメリカ村から鰻谷、ヨーロッパ村あたり。それが今では、南船場、北堀江周辺から、さらにここまでいくと界隈と呼べるかどうかは別として、西本町あたりまで北上してきています。確かなに行ってみると自分がオジサンになった事も影響していますが、アメリカ村の若年化は急速に進んでいて、自分の世代では周辺から完全に



浮いてしまいます(なぜこれほど外国人が街なかに立っているのか、直感的にヤバイのではとも感じてしまいます)。さらに、新婚時代に家具を見に行った立花通りは、「オレンジ通(ストリート)」として東京系のファッションの街に変貌(ここでも、浮いている自分に気づく)。しかし、営業時間は20~21時までが多く、夜は人通りがまばらに(ナショナルショップは、店の方もサラリーマン化しているのか)。

それに比べると、南船場や立花通り北側の堀江では、まだ大阪らしい「もったり感」が残っていて、カタカナ業の方だけでなく、本町周辺のサラリーマン、中小企業の社長、職住近接の都心居住者、長堀沿いのブランドショップに集まるOL等を含めた大阪人が、少しお洒落に生活を楽しむ街として、新しい店、ひと、情報、流行等を媒体に、新陳代謝を行い増殖していく予感が感じられます。

総じて感じるのは、既存のビルを1~2階だけ改修し、家賃や初期投資を抑えている店は、オーナーの趣味・好み(硬く言うと哲学や生き方?)を前面に出しているということ。さらにこれらの店が縁辺部立地していくのは、家賃の問題もあると思いますが、これらの主張を感じ、共(響)感する人々が新しい界限を求めて集まるからでしょうか。



### 三都物語・京都

#### 京都のフリマ近況

【京都事務所/高橋 はるみ】

最近、市内のあちこちでフリーマーケットや町衆フォーラム等が開かれています。中には不況の影響かりサイクル意識からか、手作りのミニフリマのようなものみられます。

元祖フリマというか、一番有名なのは、毎月21日に東寺で開かれる弘法さんの市です。その他に毎月定期的開催されるものとして、北野天満宮の市(25日)、百万遍知恩寺の手作り市(15日)、西陣楽市楽座(12日)などがあり、これ以外にもあちこちでかわいいミニフリマが開催されています。

ミニフリマは、事前情報が少ないので、お勧めは、やはり百万遍知恩寺の手作り市でしょうか。ここはネーミング通り手作りが原則です。お手製のアクセサリーはもちろん、色ガラスの花瓶や小物、手書きのポストカード、和装小物、衣服、陶器に加え、自家製パン、クッキーやケーキ、季節によってはおでんやあんみつ等も並びます。

中にはデパートに納品しているプロ級の方もいて、超お買い得です(もちろんデパートの値段よりずっと安いです)。小銭と千円札をたくさん用意して、ぐるっと一周すれば、お財布は



百万遍知恩寺の手作り市：陶器のアクセサリ屋さん

空っぽ、お腹と両手はいっぱいという状態に陥ります。

町衆フォーラムも盛んです。最近の一例をあげると、「下京門前町ルネッサンス」があり、東西両本願寺の門前町が中心になり開かれました。

本願寺にも協力をお願いし、普段は非公開の庭園や書院を無料で開けてもらい、多くの市民や観光客が訪れました。同イベントでは、スタンプラリーやフリーマーケット、体験工房等も催されました。目新しい企画ではありませんでしたが、町内の方々が皆笑顔で取り組んでいるのが、魅力的でした。枳殻邸の名で知られる庭園でお茶席も設けられましたが、これも町内の奥様が着物でお点前をされました。「皆で行なうので、今日は裏も表千家も藪内もごちゃ混ぜです。」と笑っておられました。

今年が最初という事もありますが、「であいふれあい」をコンセプトに「はんなりにぎあう」門前町にしていこうという思いが感じられる一日でした。

京都のまちは、今日も元気です。

ふだん何気なく暮らしているまち。最近、オープンカフェやこじやれたお店ができた、若者が集まってきたり、なんだか活気づいているまち。そんな気になるまちが身近にありますか。本号では「三都物語」と銘打って、京都・大阪・名古屋から、元気なまちを紹介しました。

## アルパックプラネット10号を発行



アルパックの技術情報交流誌「アルパックプラネット10号」を発行いたしました。本号の特集テーマは「ストック活用と都市の再生」です。掲載内容は次のとおりです。

### <インタビュー>

- ・空間経済学の観点から捉える日本再生—多核化への提言—／京都大学教授藤田昌久氏
- ・地域の活性化に貢献する公共施設のあり方  
／国土交通省東北地方整備局営繕部長  
圓田義則氏

### <オリジナル小論文>

- ・京阪神圏の都市再生(リノベーション)はいかにあるべき
- ・大都市部における産業再生のあり方
- ・名古屋地域における建物ストック活用の現状
- ・ごみを作らないライフスタイルの転換にむけて
- ・京都府の住宅事情と有効住宅ストック
- ・公共賃貸住宅団地、ニュータウンの再創造に向けて
- ・「多自然居住地域」における地域資源の「エコミュージアム」の手法導入による住民主体のストック活用
- ・京滋奈三・広域交流圏「畿央の杜」の形成構想

### <アルパックセミナー>

- ・アメリカの危機管理とIT戦略  
／Institute of Public Administration  
主任研究員青山公三氏

※お問い合わせ先：大阪事務所企画推進部(中村)



産業と文化の息づく街へ  
**創造都市への挑戦**  
佐々木雅幸



岩波書店

「創造都市への挑戦」

—産業と文化の息づく街へ—

- 著者：佐々木雅幸（立命館大学政策科学部教授）
- 発行：岩波書店

21世紀は「創造都市」の世紀

グローバルゼーションが進み、国際的な都市こそが21世紀を牽引する、という考え方が広まっている。ところが著者は、20世紀が「国家の世紀」、それも「超大国の世紀」であったとすれば、21世紀は「都市の世紀」となる。その時、いかなる都市が21世紀のモデルとなりうるのか、といえは、「世界都市」ではなく「創造都市」だと主張する。

「世界都市」を否定している訳ではない。創造力を持たない都市は、21世紀を生き延びることができない、それは「世界都市」といえども例外ではない、といっているのである。

著者の言う「創造都市」とは、どのようなも

紹介者／京都事務所 山口 繁雄

のかというと、「人間の創造活動の自由な発揮に基づいて、文化と産業における創造性に富み、同時に、脱大量生産の革新的で柔軟な都市経済システムを備えた都市」である。また、「21世紀に人類が直面するグローバルな環境問題やローカルな地域社会の課題に対して、創造的問題解決を行えるような「創造の場」に富んだ都市でもある。

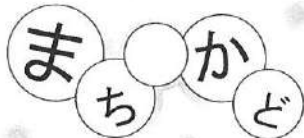
創造都市への挑戦を

このような都市の典型的な事例として、イタリアのボローニャと日本の金沢を重点的に取り上げ、創造都市としての特色を紹介している。そうした中でも特に、ボローニャは、「第三のイタリア」と呼ばれる中部イタリアの中心都市の一つであり、フィレンツェやヴェネチア等とともに、財政赤字で破綻状態であったイタリアの救世主としてのモデル的役割を果たした。

つまり、産業政策を思い切って分権化して、地域の中小企業の「企業家精神」を刺激し、一部の福祉サービスは新しいタイプの協同組合とのパートナーシップで供給すること等により、財政の効率化を図るというやり方である。この方式は、産業空洞化や財政危機等に苦しむ我が国の経済社会を地域から建て直すモデルとして大いに参考になる。

いずれにせよ、今後の都市再生のポイントは「創造」にあると指摘している点は、非常に興味深いものがある。

定価（本体2,500円＋税）



## 人との触れ合いのある産業団地

〔大阪事務所／森脇 宏〕

下の公園のような写真は、フードパル熊本という産業団地の一面です。ここには、お菓子、豆腐、漬物、ソーセージ等の食品工場が集まっており、しかも全工場が、自社製品を販売する小売店やレストランを併設しているため、団地内の中央部に公園と園内通路を設け、園内通路に面して各工場の併設店舗が建てられています。店舗のデザインはキッチュ（ニセモノ風）で、工場まで同様なデザインとなっているところもあります。

一方、工場の原材料や製品の搬出入は、これら中央部を取り巻く環状の団地内道路で処理され、貨物車が中央部に進入せず、しかもその搬



外周道路に面する工場と駐車場舗

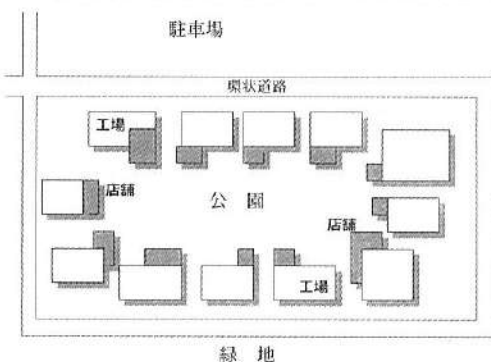
出入作業も中央部から見えないように工夫されています。また、来訪者の駐車場も、この道路の外側に配置され、来訪者の自動車も含めて、自動車と人との動線が明確に区分されています。

この産業団地は、熊本市内の工場を郊外に集約するため、環境事業団の協同組合方式で整備された約26haの団地で、平成9年11月のオープン以来、当初の予想を上回る消費者を集めているようです。また、産業団地の事業主体となった協同組合は、熊本市が以前から続けていた勉強会に参加していた市内中小企業が中心になって設立されたもので、しかも、その勉強会はペア方式とって、各企業のトップと、将来の会社を担う第一線で働く若手のペアで出席してもらっていたようです。これも、この団地の特徴の一つだと思います。

昨秋、熊本市での路面電車サミットに参加した後、少し時間ができたので、サッと眺めてきただけの報告です。したがって関係機関へのヒアリング等もできておらず、最近の動向もつかめていませんが、なかなか面白い例なのでご紹介した次第です。



団地内中央部の公園を囲んで建つ各工場の併設店舗



施設配置のパターン図

### アルパック (株)地域計画建築研究所

- ・本 社 URL:<http://www.arpak.co.jp> E-mail:[info@arpak.co.jp](mailto:info@arpak.co.jp)
- ・京 都 事 務 所 〒600-8007京都市下京区四條通り高倉西入ル立売西町82・大和銀行京都ビル6F/TEL(075)221-5132 FAX(075)256-1764
- ・大 阪 事 務 所 〒540-0001大阪市中央区城見1-4-70・住友生命OBPプラザビル15F/TEL(06)6942-5732 FAX(06)6941-7478
- ・名古屋事務所 〒460-0008名古屋市中区栄3-18-1・ナディアパークビジネスセンタービル13F/TEL(052)265-2401 FAX(052)249-3925
- ・東京事務所 〒188-0001東京都国立市北1-1-17・田畑ビル3F/TEL(042)501-2531 FAX(042)501-3024 分室/TEL(03)3226-9130
- ・九州事務所 (株)よかネット 〒810-0001福岡市中央区天神1-15-35・ホンダハビエ 5F/TEL(092)731-7671 FAX(092)731-7673